

バラの香油を溶かしたお湯につかりながら、側に控えている使用人をチラチラと盗み見る。彼はいつも通りすました顔で、ふかふかのタオルを持って待機していた。

先日頭を打って前世の記憶を取り戻してしまった故か、いままでは疑問なく受け入れていたことが途端に奇妙な風習になって、受け入れがたくなってしまった。異性の使用人に疑問なく裸体を晒していたことも、風呂上りの濡れた身体を平然と拭かせていたことも、途端に恥ずかしくなってしまったのだ。

「エリサお嬢様、あまり長湯するとお身体に障りますよ」

「ロ、ロラン、わ、かった。そろそろ出るわ」

覚悟を決めてから勢いよく湯舟から立ち上がれば、いままで乳白濁のお湯に隠されていた裸体が惜しげもなくさらされる。本当は胸も秘所も隠したいけど、そんなことをすると不審に思われてしまう。

「お嬢様の身体はいつ見てもお美しいですね。この張りのある乳房も、桃色の突起も、すべて男好きのするいやらしい身体で、このきゅっとしまったくびれもたまりません」

「~~~~っ！ あ、ありがとう……」

まるでセクハラのような言葉を浴びせられながら、ふかふかのタオルが乳首を掠める感触に身体を震わせる。この世界には魔法がある。そして性に奔放なこと、男を手玉に取れてこそ、一人前の魔女とされるのだ。女王の治める国は代々女系の娘が継ぐため、父親の家柄がよいことに越したことはないが、あまり重要視されない。

そんな日本での常識が通じないこの国の貴族令嬢は、お気に入りの使用人と夜ごと交わることで、快楽と魔力を得る。体液にはその人間の魔力が色濃く溶けだしており、交わることで魔力を共有できるのだ。

そんな事情もあって、この魔女の治める国は異様なほど性に奔放だ。お気に入りの男性使用人に身の回りの世話をすべてさせることが慣例になっている。そのお世話というのは、もちろん夜も含めたすべてだ。

「お嬢さま、足を少し広げていただきませんと大切な場所が拭けませんよ」

「わ、わかってるわ」

促されてから、ぴったりと閉じていた足の力を抜く。少しだけ太ももの間に隙間を開けると、骨ばった手がするりと入り込んできて、プルプルと震えてしまう。柔らかいタオルが、恥丘を優しくなでる。

「んっ♡」

甘い声を出してしまったわたしに、ロランはゆっくりとタオルを太ももの付け根に移し、指でぐにっ♡と肉ビラを広げた。

「あっ♡」

「お嬢様の綺麗なおマンコ、しっかり拭かないとお風邪を召してしまいますからね」

外気に晒された秘所がふるふると震える。陰唇を濡らしているお湯がタオルにしみ込んでいくのがわかる。ふかふかの繊維が時折肉芽を掠めて、じゅわつとお湯ではない粘っこい液が染み出していくのがわかる。

「っっっ♡♡」

記憶を取り戻す前、何度もロランに慰めてもらったことを思い出す。優しくクリの皮を剥かれて、熱い吐息を掛けられて、何度も舐めしゃぶってもらった♡クリだけじゃない。ナカにもずいぶんとご奉仕してもらった。顔に似合わないバキバキのカリ高チンポで最奥を容赦なく突かれた快感を思い出して、ヒクヒクおマンコが震えてしまう。

思わず熱い吐息を吐けば、ロランがおもむろに耳元で囁く。

「お嬢様、今夜はベッドにお伺いしましょうか？ たっぷりご奉仕して差し上げますよ」

あまりに直接的すぎる誘い文句に、ぼつと顔が赤くなるのを感じた。ほかの使用人も控えている中で、今夜セックスしに貴女の部屋を訪ねましょうかと伺われているなんて、現代日本の常識で考えると羞恥プレイがすぎる。だがロランは忠実に役目を果たそうとしているだけで、この世界であれば、いちいち恥ずかしがる方が異常なのだ。

お腹の奥から湧き上がる熱をなんとか押し殺して、わたしは首を横に振る。

「だ、大丈夫よ。こ、今夜は少し書き物をしたいから、大丈夫。あなたもゆっくり休んでちょうだい。もう下がっていいわ」

一瞬、形のいい眉が歪んだ気がするが、ロランは忠実な執事だ。主人に対して不満をあらわにするはずがない。

「承知いたしました、お嬢様。では今日はお休みさせていただきますね」

もろもろの着替えを他のメイドに任せて、ロランは背中を向ける。彼の姿が見えなくなってから、わたしはふうつと息を吐いた。

天蓋付きの大きなベッドに身を横たえながら、なにをやるではなく寝返りを打つ。身体に灯った熱は時間が経てば落ち着くかと思っていたのに、むしろ強くなっている気がする。

「ロランに悪いことしちゃったな、ロランだってお仕事したいよね」

執事である彼にとっては主人の性欲処理も仕事の一環だ。仕事熱心な彼にとっては満足に職務を果たせないのは不本意だろう。

「でも、このままずっと執事でいてもらうのも気が引けるし……」

この国の慣例では、正式な結婚をしてもお気に入り、の使用人や、恋人を持つことは咎められるものではない。むしろ生まれ持った魔力は人によって千差万別だから、あまたの男性と交わった女性ほど優秀な魔女となるといった俗説もあるほどだ。女王陛下も堂々と式典に正式な夫ではない使用人や恋人を参加させているくらいなのだから、社会的にも容認されているんだろう。

「でも、わたしはそんなことできる気がしないよ……」

元々、この世界の貴族令嬢としては驚くほど経験がない。セックスなど、ロランとしかったことがないのだ。

「……ロランがわたしの旦那様になってくれればな」

ぼそりとつぶやけば、ドキリと胸が高鳴る。お嬢様、ではなく名前で呼ばれることを想像して、とろりと愛液が流れていく。優しく身体を暴かれて、切なそうに眉を寄せてかすれた声で呻きながら腰を打ち付けてくるロランを想像すると、もうたまらない。

耐え切れずにそつと秘所に手を伸ばそうとしたその時、コンコンとドアがノックされた。

「——っ！」

ドキリと胸が高鳴って、慌てて立ち上がる。

「はい、どうぞ」

返事をする、ロランが静かに部屋に入ってきた。わたしは平静を装うために口元に笑みを浮かべる。

「ロラン、どうしたの？」

蝋燭の光に照らされたロランの顔は、切なげな笑みをたたえている。

「……お嬢様は、もうオレには飽きてしまったのですか？」

「え？」

「夜のお勤めに、オレを呼んでくれなくなりましたよね。誰かほかによい遊び相手でも見つけたのですか？」

ずいっと顔を覗きこまれて、髪を撫でられる。まだ許可を与える前に、触れられたのははじめてだった。

「わ、わたしは別に。あなた以外と魔力共有なんてしてないわ。ただ、最近本

当に忙しくて」

「先ほど風呂であなたの身体をお拭きしたとき、肌を上気させて潤んだ顔をしていらっしやったから、今夜こそはお呼びがかかると思っていたのに。それに、お嬢様の大切な場所、熱くぬかるんでいらっしやった」

「そ、それは」

思わず言い淀んだわたしに、ロランは笑みを深くする。整った顔でわたしを覗きこみ、だんだんと近づいてくる。拒まないといけないとわかっているのに、ぎゅっと目を閉じてしまう。

「なんだ、お嬢様も望んでいるんじゃないですか」

「ち、が」

やわらかくしっとりした唇がおもむろに押し当てられる。広い背中に手を回せば、わたしが受け入れたと思っただけ。尖らせた舌が唇の割れ目をなぞり、

そのままぬるりと侵入してくる。

「んっ♡ふっ♡」

唾液に含まれる微弱なロランの魔力に、勝手に身体が悦んでしまう。

「そう、お嬢様とオレの魔力は相性がとーってもよかったんですね？ お嬢様、キスしただけでいつもトロトロになってしまっていましたもんね♡」

縮こまっていたはずのわたしの舌は、侵入してきた熱を喜んで迎え入れてしまう。クチュクチュ♡と水音を立てながら自分からロランの舌に絡ませて、擦り合わせる。

「あっ♡だめっ♡だめなのにい♡」

「はは♡だめ、とおっしゃっているのに自分からオレの舌チュウチュウ吸っておねだりしてるじゃありませんか♡」

ねっとりと舌を絡めた、お互いの唾液を交換する濃厚なキス。ロランの唾液

を飲み込むたびに、頭が痺れてバカになる♡お腹の奥に熱が蓄積されて、ロランと魔力供給セックスしたい♡とたまらなくなってしまう♡

「ほら、お嬢様。舌を伸ばしてください」

「んっ♡」

言われるがまま、舌を差し出せばじゅっと吸われる。そのまま口腔の筋肉でぢゅっ♡と吸われて軽く甘噛みされたら、ビクンっ♡と肩が跳ねた。

「ふ、お嬢様は本当に敏感ですね♡キスされるだけでたまらないという顔をしていますよ♡」

「ふあっ♡」

薄い寝巻の下で、乳首がピンっ♡と立ち上がっていくのがわかる。触ってほしくて思わずロランの胸板に双丘をぎゅむっ♡と形が歪むほどに押し付ける。

「おやおや、触ってほしくなっていましたか？ よろしいですよ。ロラン

はお嬢様に愉しんでいただくのが至上の悦びですから♡このキスだけでビンビンに勃起しているかわいい淫乱乳首にたっぷりご奉仕させていただきますね♡」

「ち、ちがつ♡いんらんちくびじゃないっ♡」
思わず否定してしまったわたしに、ロランは目を細めながら乳輪を優しくなぞる。

「恥ずかしがることはありませんよ♡好色なのはよい魔女の条件ではありませんか？　むしろビンビンに勃起してえらいですよ♡えらい♡えらい♡」

ご褒美とばかりに薄い寝巻のうえから乳首を摘ままれて、ゆっくりと左右にひねられる。そのまま人差し指と親指でつままれて、根元から先端までねちっこく抜かれてしまう♡

乳首シコシコされるたび、頭が痺れちゃう♡

「あっ♡ひんっ♡や、やめてえ♡」

「遠慮なさらないでください♡乳首へのご奉仕好きでしょう？ お嬢様のかわいらしい乳首が真っ赤になって、乳首イキなさるまで責任をもって愛撫して差し上げますから♡」

あっという間に芯を持ち出した乳首をロランはきゅっ♡とつまみ上げる。そしてそのまま軽く引っ張られると、お腹に溜まっていた熱が徐々に背筋を駆けあがり始めた♡

「あっ♡やっ♡いやっ♡」

「まったく、お嬢様は乳首引っ張られるの好きですね♡ただでさえ大きな乳首がもっとエッチなデカ乳首になっちゃいますよ♡でも、オレとしてはお嬢様のいやらしいお身体がもっとエッチになるのは悦ばしいことですがね♡」

クイッ♡クイッ♡とリズムカルに乳首を軽く引っ張られて、ゾクゾクとした甘い痺れが脳天に広がっていく♡お腹もじわじわ熱くなって、とろっ♡とした

粘っこい愛液がショーツに漏れ出しているのが自分でもわかってしまう♡

「あ♡ああ♡しゅごっ♡ちくびきもちいいのっ♡」

「はは♡お嬢様ったらすっかり蕩けた顔になってしまわれましたね♡敏感なお胸、ロランにご奉仕されて気持ちいいですか？」

ビンビンに勃起した乳首をぐにぐに引っ張っていた指が、今度は乳頭に移動していく♡爪をぴとっ♡と先っぽに添えられて、期待に身体が熱くなってしまう♡

「このビンビン乳首、爪でカリカリ♡ってされるのもお嬢様大好きですよ♡ほら、どうぞこのロランめに命令を♡」

「~~~~♡」

忠実な執事という立場を崩さずに、わたしにおねだりさせる気なんだ♡ひどい♡

「ロランの、ばかっ！♡」

「ええ、出来ない執事はお嬢様のご命令なしには動けませんので♡さあ、お嬢様。命令してください♡このかわいらしい乳首をどうすればよろしいですか？」
乳頭に軽く爪が食い込む。そのまま思い切り突き立ててほしい♡乳首ほじくり返してほしい♡

「あっ♡ロランの爪でカリカリして♡淫乱乳首、ホジホジしなさい♡こ、これは、命令よっ♡」

一息に叫ぶように懇願すれば、ロランが唇をゆっくりとゆがめる。そして命令通り、乳首に指が沈み込み、乳首の芯が押しつぶされる♡爪が食い込み、一番奥をほじくり返すように引っかかれた♡♡

「あひっ♡これっ♡これがほしかったのっ♡」

自制心が消え失せていく。しばらく遠ざけていた快感はあつというまに脳髓

を痺れさせて、わたしの頭をバカにしていく♡乳首だけでこんなにされたら、おマンコかわいがられたらどうなっちゃうのか自分でもわからない♡

「さあ、もっと命令してください♡お嬢様のお望みのままに♡」

「あっ♡やっ♡ちくびっ♡乳首ほじくってっ♡」

カリカリと乳頭をほじる指に腰が跳ねてしまう。おっぱいに乳首を埋め込まれて、そのままぐりぐり押しつぶすように動かされるとお腹がきゅんきゅん♡して耐えられない♡勝手に背筋がのけぞって、ガクガクと震えてしまう♡

「やっ♡イクっ♡おっぱいにご奉仕されてイっちゃうのお♡」

「はは、かわいいですね♡いいですよ♡かわいらしいト口顔して乳首イキしてくださいね♡」

ロランは胸に埋め込んだ乳首をぐりぐり♡とこねくり回す♡乳首全部を押しつぶされながら、ぐりゅぐりゅ♡と指の腹で刺激されて、いとも簡単に熱がは

じけてしまった♡

ガクガクと太ももの内側が震えて、おマンコからどろりと愛液が漏れだしていく♡弄られすぎて真っ赤になった乳首がブルブルと震えていた。

「あ♡あ♡しゅごっ♡ロランのちくびご奉仕、きもちよすぎるのっ♡」

「は♡お褒めにあずかり光栄です♡お嬢様の乳首、本当にエッチですね♡イジメすぎて真っ赤になってしまいました♡やさしく舐めて癒して差し上げないと♡」

ロランは見せつけるように舌を突き出し、ゆっくりと乳首を舐めあげる。唾液をたっぷりまとわせて、ねっとり♡とした舌使いで乳首が転がされていく♡唾液でテロテロといやらしく光る乳首が恥ずかしいのに、おマンコがきゆうっ♡とうごめいた。

「あっ♡ちくび、きもちいいのっ♡や、さつきイったのにっ♡」